

「ア、く、是から此水車小屋は僕一人のものだ、ナアニ皆の居ない方が氣樂でいゝや御馳走も一人で食べて居れば何時迄もあるは」と云つて居ました。スルト天井の方でビシリ、と

えらい、けたゝましい音がしましたので今迄平氣で居た不性鼠も我知らず首を縮めました。暫くすると又今度は前よりも一層大きなビシリと云ふ音がしたかと思ふと、ドシン、メリメリイッと云ふ音がして小屋の向ふの隅の天井が一本の梁と一所に落ちて來ました。是には流石のんきな不性鼠も驚いたと見えて我知らず戸口の方に駆け出して今しも土間へ飛び下りて敷居を飛び越え様とした時に

ゴーツと云ふ一吹強い風が來たと思ふと、ビシリ、バリバリと、ドシン、と云ふ大きな音がして此水車小屋は全くつぶれてしまいました

翌日の朝、暴風雨が止んで川の水も平時に返つた頃村の人達は破れた水車小屋を片付けに來てだんく柱や丸太を退けて行くと、頓がて入口の敷居

と梁との間でおせんべいの様に潰れた一匹の鼠を見付けました。そして人達は「鼠は剛好なもので家の到れそうになつた時などには能く前から逃げてしまふものなのに此鼠は何うしたのだらう」と不思議に思ひながら隣の家の三色猫に遣つてしまひましたとさ。

何んでも博士

お う な

とある田舎に一人の薪賣りの老人がりました。此老人の家から程遠からぬ都に一人の博士がりましたが、老人は時々薪を以て行つては色々の事を此博士から教つて來ました。そして博士と云ふものは誠にえらいものだと思ひ居ました。唯一つ腑に落ちぬことのあるのは彼の博士は時々博士それは私にも判らない。何々博士の處へ行

つて聞いて御覽ん！」と云ふことです。博士はえらい人であるのに何故なんでも判らないのだらうと思ひ居ました。或日例の通り薪を持つて博士の家に來ました、そ

して例の通り色々の事を博士に尋ねて居りました

老人「時に、先生！、私は何うかして何んでも能く判る博士になりたいと思ひますが何うしたら何んでも判らないことのない博士になれませうか」と尋ねました博士は吹き出しながら博士「それはお前！、何んでもないことだ。先づお前は毎朝早く起きて顔と頭を洗ふかね」老人「へエー、時々洗ひますが時々洗ひません」

博士「そんなことではいけない。えらい人になるには先づ毎朝よく顔と頭を洗はなければいけない。それから洋服と靴と帽子とを買つて来て着なければいけない」と云ひますので老人は早速洋服やら高帽子やら靴まで買つて来てそして毎日能く顔を洗い頭を洗ひて居ました。鏡で見るとコレハマア大變な立派なもので前の薪屋さんのおぢいさんとは逆も比べものになりません。老人大悦びで何んだか前より大變惻好になつた積りで遇ふ人毎に「私は今度何でも博士と云ふ博士になりました」

と吹聴して居りました、之を聞いた村の人達は「可哀相に薪屋の爺さんは氣が狂がつたよ」と云つて居ましたがおぢいさんは氣狂處ではなく本氣に博士になつた積りでした。

處が或晩のこと村の金持の家に泥棒が入つてお米を五俵持つて行つてしまひましたがおうしてもわかりません。スルト一人の若者が

若者「判らなければ何んでも博士に聞といへや」と云ひましたので、夫れよからうと早速使を遣つ

てお爺さんを呼寄せました。

お爺さんは例の洋服に靴を穿いて然もえらさうにやつて來ました。金持は早速お爺さんを客間に通して色々の話をしながら泥棒は何處に居るだらうかと聞きました。スルトお爺さんは一寸首をかしげて考へて居りましたが

「ナニ直にわかるだらう、少し御馳走でも食べて居る中には判るに違ひない」と云ひますので早速御馳走を運ばせました。先づ最初に出たのがまぐろのおさしみ、お爺さんは之を見て

「ハ、ア、之が一番だ」と何の氣なしに云ひまし

たが此時給仕に出た男は驚いて青くなつて引き込んでしまひました、次に出たのが鯛の鹽焼、之を見たと爺さんは

「ハ、ア、之が二番だね」と云ひましたので此給仕男も驚いて戦へながら引き込んで行きました。

次に出たのが鶏のお吸ひ物、お爺さんは亦も

「ハ、ア、之が三番だ」と云ひましたので此給仕男もこそくと逃げて行きました。次に出たのが栗のきんとん、お爺さんは亦も

「ハ、ア、之が四番だ」と云ひましたので給仕は又急いで出て行きました、其次に來のが豚の甘煮スルトまたお爺さんは

「ハ、ア、之で五つだね」と云ひましたので給仕はもう逆もかくせないと思つて

「お爺さん恐れ入りました。私共が盗んだに違ひありません」と云つて白狀してしまひました是から何んでも博士の名が廣まつて薪屋のお爺さんはほんとの博士になつてしまひましたとさ。

めでたし〜〜。

猪と狐

或日狐が山を散歩して居ると向ふの方で猪が頻りに牙を研いで居りましたので狐は不思議に思つて

狐「猪さん〜君は何をして居るのだね？」

と聞きました。スルト猪はけいんな顔して

猪「何するつて、御覽の通りさ、別段何んでもないさ。」と云ひますから狐は猶更不審に思つて

狐「夫れでもおかしいではないか獵師も來ては居ないし、喧嘩の合手も居ないのに、そんなにあはてないでも宜いぢやないか、それより向ふの方へ行つて遊ばうよ。」と云ひました

猪は一向平氣で獵師が來たり、喧嘩の合手が出て來てからは仕事は澤山あるからね」と云つて居りました。